



# CAJLE

# Newsletter

No. 39 December 2009

カナダ日本語教育振興会

Canadian Association for Japanese Language Education

P. O. Box 75133  
20 Bloor St. East Toronto, Ontario M4W 1A0, Canada  
Email: [Cajle.Kaikei@gmail.com](mailto:Cajle.Kaikei@gmail.com)  
Web: <http://cajle.info>

Editors: Keiko Aoki, Yoko Sugimoto, Shunko Muroya (Chief)

Copyright@CAJLE 2009

目次	
☐ CAJLE 会長から	2
☐ CAJLE2009 年次大会	3
2009 年年次大会を終えて	3
年次大会報告	4
参加者からの感想	5
年次総会報告	6
☐ CAJLE2010 年次大会	11
年次大会予告	11
研究発表募集案内	12
☐ 支部会・教師会・研修会・学会報告	14
JSAC	14
ICJLE	15
BC Japanese Teachers' Summer Seminar	16
CASLT	17
オンタリオ部会	18
☐ 日本語教育イベントカレンダー	18
☐ リレー随筆	19
☐ CAJLE 掲示板	21
2008 年度年史	21
CAJLE Membership	23
☐ 国際交流基金コーナー	24
☐ 巻末言	25
☐ 編集後記	26

## 会長のことば

会長代行 西島美智子

ついこの間年次大会が終わったばかりと思っていたのに、あっという間に12月になってしまいました。みなさま、いかがお過ごしでしょうか。今秋は比較的緩やかな気候が続き、冬の訪れが遅いのはありがたいですが、カナダをはじめ、世界各地で洪水の被害があったり、H1N1型インフルエンザの感染が広がっていくニュースを目にし、気を緩めないようにと思うこの頃です。

CAJLEは、今年もさまざまな活動を行ってきました。トロントで行われた夏の年次大会は、例年より短い2日間という初めての試みで開催しましたが、大変充実した内容で、参加された方々からも良い評価をいただくことができました。また、ジャーナルCAJLEは、新たな編集委員会のもとで編集が進み、大会開催と同時に、第10号の発行に至りました。質の高い学術刊行物を発行することは、CAJLEの大きな誇りと言えるでしょう。さらに、夏の終わりには、国際交流基金トロントセンターで行われた「日本語教育レクチャー・ワークショップ」に共催参加し、多くの参加者を集めました。これを契機に、今後もトロントおよびオンタリオ地域での部会活動が再び活発になるものと、おおいに期待しています。そして、このニュースレターも、一度も欠かすことなく年二回の発行を続けています。

今年の年次大会のテーマは「教師間・教育機関の連携をめざして」でしたが、それにふさわしい連携が生まれました。ひとつは、Nihongo BCとの連携です。年次大会のパネリストとしておいでくださったレノビッチ小本祥

子先生とのご縁がきっかけで、今後も、日本語教育に関する活動を協力して行っていくことを確認し合いました。もうひとつは、カナダ全体の第二言語教師のために組織されているCASLTとの連携です。日本語教育の振興に携わるCAJLEが、CASLTに積極的にメッセージを伝えることで、カナダにおける日本語教育をさらにアピールすることができればと願っています。また、CASLTがCAJLEの活動を評価し、後方支援を申し出てくださいことは、今後の活動の大きな励みになります。

さて、来年はどのような年になるのでしょうか。まずは、バンクーバーで開催される冬季オリンピックが始まるっていいのではないのでしょうか。私が住むカナダ東部では、すでに聖火リレーが通過し、着実に西に向かって進んでいます。世界中の人々がバンクーバーに注目する日も間近ですね。そして夏には、そのバンクーバーで年次大会が行われることとなります。きっとすばらしい年になるものと、今から楽しみです。

みなさまも、どうかインフルエンザに気をつけて、お元気で年末を過ごされ、良い年を迎えられますように。

最後に、大江都会長は、健康上の理由から、1月末までCAJLEの業務から離れることになったため、今号のごあいさつは私が代行しましたこと、ご了解くださるよう、お願いいたします。来年の年次大会には、いつもの元気な大江会長のお顔が見られるものと思います。

## CAJLE2009 年次大会

## 2009 年年次大会を終えて

実行委員代表：青木恵子、有森丈太郎、下條光明

今年度の年次大会は「これからの日本語教育を考える——教師間・教育機関の連携を目指して」をテーマに掲げ、国際交流基金の支援のもと、8月15日(土)、16日(日)の二日間にわたり国際交流基金トロント日本文化センターにて開催された。「連携」という言葉は、cooperation, collaboration, coalition, coordination, articulation というように、さまざまな解釈が可能なキーワードである。カナダ全土の日本語教師・教育機関の連携を目指すことはもちろん、学習者のスムーズな移行を可能にする縦・横の繋がり、日本語と他教科との協働等、日本語教育の向上・発展につながるさまざまな広がり意識して設定したテーマであった。

2日間の大会には、カナダ、アメリカ、日本から延べ100人を超える参加者が集い、研究発表、教師研修会、パネルディスカッションに出席した。研究発表では、実践報告、日本語学、言語習得などの分野で18本の発表があり、二会場同時進行で行われた。最新の研究成果やケーススタディーが発表され、10分間の質疑応答では活発な意見交換がなされた。両日の昼には恒例の幕の内弁当をいただきながら、そして、一日目の夜には、会場から徒歩圏内のチャイナタウンにある中華レストランでおいしい海鮮料理に舌鼓を打ちながら、和やかな雰囲気の中で交流が行われ、親睦を深めた。また、大会二日間にわたって「にほんごサークル」による日本語教育関連の書籍・教材の展示販売もあり、遠方に住む教師にとってはいろいろな教材を手にとって吟味できる貴重な機会でもあった。

今年は日程が短縮されたため基調講演はなく、教師研修会が二つ行われた。講師にパデュー大学の深田淳先生と国際交流基金ロサンゼルス日本文化センターの磯山(渡邊)真紀先生を迎え、実践的なワークショップが行われた。1日目の深田先生の研修会では、「コーパ

スを使った言語研究から日本語教育での利用に向けて」と題して、前半にコーパス言語学の諸分野の概観、最新の外国語教育への応用研究が紹介され、後半はデモンストレーションを交えながら、具体的な日本語教育への応用が紹介された。特に、コーパス分析からどのような語と語の結びつきが強いかというような、いわゆるコロケーションの興味深いデータを交えながら、日本語教師も知っておいて役に立つコーパス利用法をご教示いただいた。2日目の磯山(渡邊)先生の研修会では、「日本語教師のコネ作り——連携のあり方とその方法のコツ」と題して、高校や大学といったレベルを超えた教育機関の連携の他に、どのような連携が必要なのか、またそれをどのように実践していくのか、ということが多くのリソースと共に紹介された。研修の中では、「なぜあなたは日本語を教えるのか」「なぜ学習者は外国語を学ぶべきなのか」「なぜ日本語なのか」「なぜあなたはやめさせられるべきではないのか」など、普段はあまり考えないような(考えたくないような?)刺激的な質問を投げかけられ、出席者は小グループに分かれてそれぞれ考えを述べ合い、理解を深めた。長引く景気停滞を受けての予算カットで、コースや教員の削減に踏み切る教育機関も少なくない。そんな中、いかに日本語プログラムを維持し、かつ、向上発展させていくか。それを実現するための「コツ」を伝授していただいた、非常に有意義な研修であった。なお、来夏発行のJournal CAJLE11号に教師研修会に基づく寄稿論文が掲載される予定であるので、詳しくはそちらを参照されたい。

パネルディスカッションは2日目の午前中に行われた。深田、磯山両先生に加え、前BC州日本語教師会会長、及びBC州バーナビーマウンテン高校のレノビッチ小本祥子先生をパネリストに迎え、「連携」をテーマに実践的な活動の紹介と日本語教育のこれからについて意見交

換が行われた。今回のパネルは、高校、大学、国際交流基金と異なる機関の視点から多面的な話を聞くことができ、一口に連携と言っても、そのあり方は様々で、ゆえにそこには大きな可能性があるのだと実感させられる示唆に富む内容であった。

舞台裏の話をする、1年前の大会終了時から準備を開始したのであるが、その後まもなく天皇のカナダご訪問が夏と決まり(トロントは厳戒態勢?)、春には新型インフルエンザの流行もあり(日本ではカナダは「蔓延国」との報道)、実行委員はずいぶんと気をもんだ。しかし、

結果的には初参加の方や地元の先生方にも多く足を運んでいただき、苦勞が報われた思いであった。今年のオンタリオ州は冷夏だったが、この週末は珍しく30度を記録し、外も会場の中も熱気に包まれた二日間であった。来年の開催地はバンクーバーのプリティッシュ・コロンビア大学に決定した。それぞれ一年後の再会を約束して帰途に着いたが、どのような大会になるのか、今から楽しみである。最後に、今大会の実現に向けてご協力およびご指導くださった皆様、参加者の皆様に心より感謝を申し上げて、結びとしたい。

## 2009年度年次大会報告

本年度の年次大会は、前年に引き続きトロント国際交流基金からの多大な援助協力を得て、8月15日より二日間に渡り国際交流基金トロント日本文化センターにて開催された。大会は、二日間で参加者数が懸念されたが、初日の参加者数50名、二日目は52名と前年度の大会に近い参加者数を達成することが出来た。本年度の大会は、あらゆる教育機関の教師達の連携による日本語プログラムの充実と学習効果の向上を目標とする「これからの日本語教育を考える- 教師間・教育機関の連携を目指して」をテーマとし、カナダ内外からの多彩な参加者の基に、昨年と同様に研究論文発表、教師研修会、パネルディスカッション、教材展示販売等が行われた。また、大会初日の晩には、市内の中華海鮮料理レストランにて和やかに懇親夕食会が設けられた。

なお、年次大会アンケートは、回収数28で下記の結果がまとめられた。

### 1. 全体評価

- とてもよかった 13名
- よかった 14名
- あまりよくなかった 0名
- 無回答 1名

### 2. 参加したセッション (懇親会を除く)

- すべてに参加 13名
- ほぼすべてに参加 9名
- 教師研修会1とパネルディスカッションのみ 3名
- パネルディスカッションと教材展示及び即売会のみ 1名
- 研究論文発表と教師研修会2のみ 1名
- 教師研修会1とパネルディスカッションと教材展示及び即売会のみ 1名

### 3. よかった点、改善すべき点

#### 研修論文発表

##### よかった点

- バリエティーに富んでいて、室の高い発表があり、よかった。勉強になった。
- 世界各地からの色々な教育場面からの話が聞けてよかった。
- 文法が参考になった。
- 実用的なウェブサイト情報がもたらえた
- データを用いて両親、日本語を学ぶ学生に学習の重要性を説得するというのが、重要な視点だと思った。

- 自分のアプローチとは違う新鮮な研究について  
知ることが出来た。(特に絵本)

#### 改善点

- 時間管理-司会の人への事前の案内を十分に。
- 時々、スクリーンが見にくかった。
- 直接、授業に関係ある発表がもう少しあったらうれしい。
- もう少し研究発表が多いとよかった。
- 発表によって内容が豊富で、時間が短すぎて  
内容が短縮されて残念だった。
- セッションのまとめ方に疑問があった。
- Show and Tell が多かったので、研究発表がもう少しあるとよかった。

#### 教師研修会1,2

##### よかった点

- ためになった。大変参考になった。
- 最近よく聞くコーパスについて詳しく知れてよかった。
- 楽しく参加できた。
- 渡邊先生のお話は、interactive でよかった。さらに、日本語教育の根本的な重要性を考えさせられた。

##### 改善点

- トイレ休憩なしの2時間はきつかった。短い休憩がほしかった。
- 具体的なリンクを教えていただきたかった。
- 画面が小さく(特に文字)見にくかった。
- 画面に沿って説明されたとき、とても聞きにくかった。
- このテーマは、本大会のテーマと少しかけ離れていると思った。
- お昼が遅れてしまった。

#### パネルディスカッション

##### よかった点

- それぞれのお話内容は興味深かった。
- レノビッチ先生のお話が、とても参考になった。
- 先生方が質問に対して、丁寧に回答してくださいました。

- 話が非常にわかりやすかった。
- 渡邊先生の連携のお話は、問題点を明示的に整理されていてよかった。

##### 改善点

- お昼が遅れてしまった。
- パネルディスカッションではなかった。

#### 教材展示及び即売会

##### よかった点

- いい教材があった。

#### 懇親会

##### よかった点

- とても楽しかった。
- おいしい料理に狭い座席で話がはずんだ。
- おいしかった。めったに食べられないご馳走が食べられた。

##### 改善点

- 全員の紹介になるような機会があればよかった。
- テーブルが異なって、皆と話す機会がなくて残念だった。

#### その他全体的

##### よかった点

- 参加者の数が多すぎず、丁度よかった。
- 皆さん、とても親切で温かった。
- 多くの人と話が出来て、知り合いになれた。
- 質の高い発表があってよかった。
- 実用的なウェブサイト情報が頂けた。
- PPT がスムーズにいき、他の学会に比べて時間の無駄がなかった。

##### 改善点

- 会場2での、声が少し聞きにくかった。
- 理論と実用のバランスがもう少しあるとよかった。
- 画面の文字。
- 言語政策についての研究発表があったらよかった。
- 第2会場の後方に座っていると、第一会場の音が大きく聞こえて、聞きにくかった。

- 教師研修会では、両方とも「情報」にかかわるトピックだったが、一方は、コンテンツベースの「日本語についての知識勉強」につながるものなら、さらによかったと思う。

## 今後の要望

### トピック

- 中級文法
- 中級、上級読解
- 授業を楽しくする工夫など、直接教室で教えることに役立つテーマ
- 柴田先生のシャドーイング
- 柴田先生には、発表に実践例なども加えて、次回又来ていただきたい。
- 言語政策についての研究
- 継承語教育の現状
- 大学での継承語学習者に何をどのように教えるか
- 文学、メディア、ビジネスなどの分野
- 絵本
- 日本文学を取り入れた授業(特に中、上級レベル)
- 高校の日本語教育
- 各教育機関で工夫されている授業やプログラムの紹介や成果発表
- 日本・カナダ・他国での年少者、高校生向けのプログラム紹介、取り組み例
- 教材作成、著作権について(法律の専門家から)
- 日本語のスタンダード
- 教室活動のような実践例
- 日本語の動向
- Discourse Analysis
- Articulation

## 開催地希望

- トロント

## 大会全体の意見、感想

- 教育者の「提携」ということがテーマだったが、この大会に参加することで教員同士のつながりがいかに大切かがわかった。
- 発表や研修会の他に他校の先生方と交わり、意見交換が出来たことが大きな収穫だった。
- 色々なバックグラウンドの方々に会えてよかった。
- 毎年参加することは難しいが、一年おきだと参加しやすい。
- 教育者意識、目的を改めて考えさせられるいい機会だった。
- 初めての参加だったが、北米における日本語教育法だけではなく、研究の最先端に触れることが出来て大変刺激的だった。
- 国語研究が日本語研究につながる可能性を今回の大会参加から探りたいと思う。
- 英語での発表が少なかったこと英語話者の参加者が少なかったことが気になった。2日間のスケジュールは、少し大変なのでは？
- 個人的ですが、会場内で個人がネットが使えるところがあれば便利だと思った。
- 資料配布がとても整理されていてよかった。
- 室内温度が涼しくてよかった。
- 日本から参加し、カナダでの日本語教育問題を知ることが出来て、大変有意義だった。2日間という日程は、集中力が程よく持続し、よかった。
- 全体的にきれいにまとまっていて良い大会だった。
- 運営、多様な面でお世話いただき感謝。
- 大変楽しく、温かみのあるすばらしい会だった。
- 又、是非参加したい。
- お疲れ様でした。

## CAJLE Annual Conference 2009

Nina Langton

The University of British Columbia - Okanagan

CAJLE's annual conference was held August 15<sup>th</sup> and 16<sup>th</sup> at the Toronto office of the Japan Foundation, and as articulated by the theme, "Exploring the Future of Japanese Language Education: Bringing Teachers and Schools Together," participants had the opportunity to meet with instructors from various institutions in North America and Japan and to hear about innovative and exciting teaching methodologies and strategies for the 21<sup>st</sup> century. The conference brought together stakeholders from all aspects of Japanese language education, including teachers from high schools, heritage schools and universities, program administrators from the Japan Foundation, and distributors of language education materials. The workshops, panel discussions, paper presentations and social activities all provided inspiration and food for thought as to how we as Japanese language educators can work to incorporate new ideas into our teaching while adhering to established best practices in our field.

The panel discussions and workshops focused on the theme of the conference in different ways. Professor Fukada Atsushi's informative lecture on corpus-based linguistic research outlined the development, types and uses of corpora for both research and teaching purposes. As a non-native speaker who often wonders "Can I really say this?" I found the information in this presentation very useful in that I learned, among other things, how corpora can be used to verify patterns and collocations that occur in natural language. I'm sure that for those of us who were unfamiliar with corpus-based linguistics, this introduction to the relatively new field of research sparked many ideas for ways to apply its tools in teaching Japanese language. Professor Fukada also participated in a panel discussion with Ms. Sachiko

Omoto Renovich, a high school teacher from British Columbia, and Ms. Maki Watanabe Isoyama, academic specialist at the Japan Foundation Los Angeles office. The makeup of this discussion panel illustrated how bringing together instructors at the secondary and tertiary levels, as well as stakeholders from the public sector, can lead to a synergy that benefits all parties. Ms. Omoto Renovich related some of the challenges she faces in the secondary system with respect to articulation, curriculum, resources and logistics, as well as the creative ways she has dealt with these challenges. As a literature-stream instructor with no formal training in second language acquisition and pedagogy, I very much appreciate hearing about teaching from someone who has had more extensive training in the field of education. Ms. Watanabe Isoyama provided the larger picture regarding articulation, reminding us that we need to be concerned not only with the "pipes" between high school and university, but also those between business and academia, Japan and other countries, and language and content. All three panelists emphasized the need for clear communication between stakeholders in order to deal with issues of articulation and build strong connections and networks to prepare Japanese language educators for the challenges of the future.

Concurrent sessions of paper presentations gave attendees the opportunity to hear about the latest research in linguistics and pedagogy, as well as innovative teaching ideas involving both newer technologies and more traditional forms of communication. While most papers were presented in Japanese, presenters who are more comfortable speaking in English were also welcome. As always, the excellent selection and quality of presentations made it difficult to choose which session

to attend. Fortunately, many discussions continued during the coffee and lunch breaks, so ideas and opinions generated in each presentation circulated while we ate our delicious obento. The theme of “Bringing Teachers Together” was also adhered to in a very collegial way as we enjoyed a wonderful Chinese seafood dinner at a well-known restaurant. These opportunities to network with colleagues from diverse locations and institutions are so helpful in generating ideas, connections, energy and enthusiasm for our profession, and CAJLE organizers and volunteers are to be commended for providing them. The opportunity to browse through new publications and teaching materials showcased by Nihongo Circle was also appreciated. This book fair was another venue where teaching ideas and

recommendations for materials were exchanged.

Thanks are also due to the conference host, The Japan Foundation Toronto, for providing a very comfortable environment where we could enjoy both glitch-free modern audio-visual technology and beautiful photography of traditional gardens at the same time. I was also impressed to see the personal interest shown by the Foundation director, Mr. Suzuki Masayuki, in attending several of the sessions and making attendees feel welcome. I am now looking forward to attending next year’s conference in Vancouver, reconnecting with colleagues I met this summer, and making new connections with K-16 Japanese language educators and stakeholders from around the world.

### CAJLE 大会に参加して

畠山衛 (コロンビア大学)  
mh2020@columbia.edu

私が初めて CAJLE に参加させていただいたのは 11 年前、1998 年のことでした。大学院で日本語教育を勉強するために日本からウィスコンシンへ行く途中に、大きな荷物をごろごろ引きずりながらトロントに寄ったのでした。ちょうど学部でお世話になった川口義一先生が教師研修会講師として CAJLE にいらっしゃることになっており、ご一緒させていただいたのです。それまで日本国内で学会に参加したことはありませんでしたが、ATJ や ACTFL よりも先に外国語教育の学会として CAJLE の洗礼を受けたのでした。

実はカナダ自体は初めてではありませんでした。さらに何年も前にアルバータ州の片田舎、人口 500 人の村に 1 年ホームステイをしていたことがあり、それ以来カナダの冬の寒さと人の暖かさを身にしみ覚えていました。初めて来た東部の都会でも、また違ったカナダの良さを感じました。アットホーム (CAJLE の枕詞かなと思います) がな雰囲気の中に行われたあの年の年次大会の印象

は、日本語教育を目指して一歩を踏み出した私の心に強く刻まれました。

それから 11 年の間に私も本格的に日本語教育に関わるようになり、CAJLE は理事役員もかなり代わられるなど変化がありました。今回も外部から参加しているはずなのに、来てみたらなぜか帰ってきたような安堵感を覚えました。最近よく使われ出している言葉で言えば「ほっこり感」でしょうか。また、研鑽の上でも得るものがありました。教師研修では、深田淳先生によるコーパスの活用に関して、最近の研究を含めてコーパス言語学を包括的に概観し、日本語教育への応用について学ぶことができました。磯山 (渡邊) 眞紀先生による日本語教師の連携についての研修では、ネットワーク作りや日本語教育に携わる意義を振り返りつつ、タテとヨコの連携について意識を高めていく重要性に気づかされました。多岐にわたる研究発表からも刺激を受けました。

今大会ではいろいろな意味で原点に帰ることができ、



この機会に再び参加させていただき、感謝しております。今度は11年と待たずにぜひまた参加させていただこうと思います。運営委員の皆様、お疲れ様でした。1年越し

の準備、いろいろとご苦労もあったことと思います。大変お世話になりました。最後に、今後ともCAJLEの更なる発展を祈念しております。

### CAJLE 2009 年次総会 議事録

日時： 2009年8月15日(土) 4:15 - 5:15

会場： 国際交流基金トロント日本文化センター

開票： 会員実数 79名

出席者 23名

委任状 14名

合計 37名 (総会成立数は会員

実数79名の10% < 7.9名 > により、総会成立)

開会宣言： 畔上ラム智子

#### 議題

1. 会長挨拶： 大江会長より参加者への挨拶の後、本総会は報告が主であるので効率よく進めたいとの意向が述べられた。
2. 議長指名： 大江会長より小室リー氏が指名された。
3. 議事進行： 小室リー氏
4. 2008年度年次大会及び総会報告： 書記代表—畔上ラム智子

- 2008年年次大会は、8月15日から17日まで国際交流基金トロント日本文化センターで国際交流基金の援助のもとで開催された。大会テーマを「変わりゆく日本語と日本語教育の今」とし、CAJLE創立20周年を記念に、多彩な角度から基調講演、教師研究、特別講演、研究論文発表、パネル・ディスカッション、教材展示販売が繰り広げられた。カナダ国内の大会参加者は昨年より17名も増え41名で、国外からは日本、アメリカ合衆国、香港、韓国などからの参加者があった。懇親夕食会にはトロント近辺より多数の日本企業関係の方々も参加され、和やかな交流がかわされた。18日のオプションツアーには、ナイアガラ日帰り小旅行も企画され、大会は大成功に幕を閉じた。

- 8月16日の2008年度の総会では、まず長年CAJLEへ書記として貢献された清水道子氏の辞任のお知らせと清水氏への感謝の意が述べられた。2008年2009年の新理事は、伊東義員氏、有森丈太郎氏、青木恵子氏、室屋春光氏、ハウ博美氏、ウッド弘枝氏が選出された。

5. 各部署における2008年度の活動、及び2009年度の活動予定の報告

広報 (ニュースレター、ウェブサイト) [青木恵子]

- ニュースレターは、2008年12月と2009年6月に発行された。本年度も同じ時期に発行予定である。室屋氏の活躍により、CAJLEのウェブサイトが全体的に改正され日本語と英語版となった。ウェブマスターは室屋氏であったが、広報理事達も更新することが可能となり迅速に広報活動が進められている。

開発企画 [西島美智子]

- 三本の柱を考慮し、広報活動を進めていく方針である。

- 1) 国内に焦点を置き開発を進める。
- 2) ワークショップやセミナーへの支援をする。これに関しては、昨年から今年の春にかけてCAJLE開発宣伝作業が続いたBC州と南カルフォルニア教師会への支援報告があった。
- 3) 助成金プログラムの発足で、トロント近辺企業の James Matsumoto Enterprises Inc, Davis LLP, Yamaha Canada Music Ltd. より助成金があった。

発表企画 [有森丈太郎]

- 2009年大会へは29本の研究発表論文が寄せられ22本の採用が決定したが、最終的には様々な理由により18本の研究論文発表となった。

ジャーナル編集 [下條光明]

- 昨年より新メンバーが発足し、下條氏、チャウ氏、有森氏、そして大江氏となった。
- 発表論文募集に関して三段階の採用様式をとった。

- 1) 年次大会研究発表者からも募集
- 2) 年次大会の講師寄稿を依頼
- 3) 投稿期限を設けずに一般からも受け入れる

- ジャーナル10号に関しては、CAJLE査読委員6名の他に14人の協力を得て合計20名の査読協力を得た。新企画として、論文掲載料を撤退することにした。

- これからの部署の課題は:

- 1) 査読の一貫性を計る
- 2) 査読委員の専門性を向上する
- 3) 広く査読を依頼する

- 尚、ジャーナル販売は新一年部 \$ 20、旧 \$ 10とする。

6. 各部会における2008年度の活動、及び2009年度の活動予定の報告

オンタリオ部会 [杉本陽子]

- 色々なプランはあったが、実際には活動がなされなかった。理由としては、会員間における情報交換がうまく進まなかった事や会員の健康状態がすぐれなかった事が活動不可能の原因になったのかも知れない。また、NJCA(新移住者協会日本語教育プロジェクト)との共催で色々な行事も予定されていたが、連絡がスムーズにいかず活動が不可能になってしまった。杉本氏は部会復帰を望み、将来について様々な意見やコメントを歓迎している。

アトランティック部会 [大江都]

- 目立ったイベントはなかったが、3月には四大学を通して行われている弁論大会があった。
- これからの課題は、会員開発を続ける事である。

7. 2008年度会計報告及び2009年2010年予算案 [会計]

- 2008年 - 2009年会計報告09年5月末現在[高

崎]

- 2009年 - 2010年会計予算案[竹井]
- 昨年度の会計報告と本年度の会計予算案は、総会全員一致で承認された。
- 詳細は、CAJLE Financial Statements, May 31, 2009 を参照。

8. 理事・役員継続についての報告 [大江都]

- 本年度の理事は、昨年度より全員継続との報告があった。

会長 大江 都 (マウント・アリソン大学)

副会長 西島 美智子 (ニュー・ブランズウィック大学)

書記 畔上ラム 智子 (リジャイナ大学)

ウッド 弘枝 (ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学)

ハウ 博美 (トロント日本語学校)

会計 高崎 麻由 (クイーンズ大学)

竹井 明美 (ランガラ・カレッジ)

杉本 陽子 (トロント日本語学校)

広報 室屋 春光 (JFローマ日本文化会館)

青木 恵子 (クイーンズ大学)

杉本 陽子

開発企画 西島 美智子

伊東 義員 (トロント日本商工会)

小室リー 郁子 (トロント大学)

発表企画 有森 丈太郎 (トロント大学)

チャウ レベッカ (ブリティッシュ・コロンビア大学)

下條 光明 (バッファロー大学)

ジャーナル編集 下條 光明

有森 丈太郎

大江 都

チャウ レベッカ

9. ICJLE 2009参加についての報告 [大江都]

- 昨日(8月14日)の理事会で報告があったので、下記は理事会議事録から引用(イタリック体)。  
*ICJLE (International Conference on Japanese Language Education) への参加*

2009年7月、オーストラリアのシドニーにおいて「2009年度豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会(JSAA-ICJLE 2009)」が開催され、CAJLEの代表(カナダ代表)として、以下のプログラムに大江理事が参加した。  
<http://jsaa-icjle2009.arts.unsw.edu.au/en/index.html>

1) 「日本研究と日本語教育の連携」と題した各国代表によるパネル・ディスカッション

<http://jsaa-icjle2009.arts.unsw.edu.au/jp/discussion.php>

11の国、地域代表が参加。大江理事は、「日本研究と日本語教育の連携—カナダの大学における日本研究の媒介言語についての考察」を発表した。後日、Proceedingが編集される予定である。

2) 日本語教育グローバルネットワーク代表者会議

ICJLE 2010 台湾にて開催。(台北)

ICJLE 2011 中国(北京または天津)

ICJLE 2012 日本(東京)

- 日本語教育学会創立50周年を記念して以降は隔年開催が理想。

ICJLE2014 北米で開催の可能性有り。

- アジア諸国は大会に熱心で、前回はアジア諸国から1000人以上の参加者があった。

それに比してカナダは4~6人の参加だった。

内容・ネットワーク共に充実した大会なので、

他の理事にも是非参加を推奨したい。(大江)

10. CASLT (Canadian Association of Second Language Teachers)との連携についての報告 [西島美智子]

- 昨日(8月14日)の理事会で報告があったので、下記は理事会議事録から引用(イタリック体)。

*CASLT (the Canadian Association of Second Language Teachers)との連携*

*Nihongo BC: BC Teachers of Japaneseのチェアであるレノビッチ氏をパネリストに招聘したことをきっかけに、CASLT代表のThibault氏が大会に参加、日曜日の昼時間にCAJLE代表者(大江・西島理事)、国際交流基金(齋藤・永富氏)とこれからのネットワーク作りのための顔合わせの会合を持つことになった。*

- なお、CASLTは年二回ニュースレターを発行しており、CAJLE理事の青木氏がCAJLEの案内を次のCASLTのニュースレターに載せる予定である。また、12月のCAJLEニュースレターには、CASLTの紹介も企画されている。

11. CAJLE 2010開催地

- 大江会長より次回2010年CAJLE年次大会は、BC州のUniversity of British Columbia(UBC)で開催されるとの発表があった。2010年CAJLE実行委員を代表してレベッカ・チャウ氏が多数の参加者が素晴らしいブリティッシュ・コロンビア州を訪れることを望んでいると喜びの挨拶をした。

12. 閉会の辞 [大江都]

- 大江会長より閉会の言葉で2009年CAJLE総会が終了した。

## CAJLE2010年次大会

### 2010年 年次大会

#### 実行委員会

2010年度CAJLE年次大会は、8月13日(金)、14日(土)、15日(日)の三日間の日程で、冬季五輪開催地であるバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学にて開催されます。例年通り、基調講演、研究発表、教

師研修、パネルディスカッションなどのプログラムを予定しております。ここで、基調講演者としてプリンストン大学の牧野成一先生をお招きすることが既に決定しましたこともあわせてご報告いたします。

本年度の大会は「日本語教育の新たな可能性：言語・コンテンツ・文化の統合」をテーマとし、日本語学、日本語教育、言語教育、日本研究など、さまざまな分野の研究者及びあらゆるレベルの教育機関でご活躍の先生方に、このテーマを多角的視野から討論していただけることを望んでいます。そして、参加者による理論・実践報告・課題の提示などを通し、新たなカリキュラム・評

価法作り・教材開発などの示唆になることを願っています。プログラム詳細は決定次第、CAJLE のウェブサイト (<http://cajle.info>)にてご案内いたします。カナダ国内外の様々な機関で日本語教育に携わる皆様のご参加を、心からお待ち申し上げます。

問い合わせ先: [cajle2010@gmail.com](mailto:cajle2010@gmail.com)  
(実行委員会)

## 2010 CAJLE Annual Conference

The 2010 CAJLE Annual Conference will be held on the campus of the University of British Columbia in beautiful Vancouver, the site of 2010 Winter Olympics, for three consecutive days from Friday August 13 through Sunday August 15. The conference will include a keynote speech, concurrent paper presentations, workshops and an expert panel discussion. We are pleased to announce that Professor Seiichi Makino will be the keynote speaker for this year's conference.

The theme for this year's conference is "Emerging Possibilities for Japanese Language Education: Integrating Language, Content and Culture." We aim at gathering together researchers from all related academic fields including Japanese linguistics, pedagogy, language education, and Japanese studies as well as Japanese

Organizing Committee  
language teachers from all levels of institutions to explore this theme from a variety of perspectives. Through the sharing of their theories, practices and challenges, we hope to gain insights that will be useful for designing more innovative curricula and assessment methods, as well as for developing more effective teaching materials.

Details of the program will be published on the web site (<http://cajle.info>) as soon as they become available. We wholeheartedly welcome the participation of everybody involved in Japanese Language Education from all levels and types of educational institutions around the world.

If you have any further inquiries, please contact us at [cajle2010@gmail.com](mailto:cajle2010@gmail.com).

## カナダ日本語教育振興会 2010 年次大会 (CAJLE 2010) 研究発表募集

カナダ日本語教育振興会(CAJLE)では、「日本語教育の新たな可能性：言語・コンテンツ・文化の統合」をテーマに CAJLE2010 年次大会を、8月13日(金)～15日(日)の三日間、プリティッシュ・コロンビア大学にて行う予定です。本大会では日本語教育関連分野における研究発表に加え、基調講演、教師研修会およびパネルディスカッションなどを計画しています。

研究発表は、日本語学、日本語教育、継承語教育などの理論的考察、実践報告、また教材開発などを扱っ

たもの、特に大会テーマに沿った発表を歓迎いたします。また共通のテーマに沿ったグループでの発表も受け付けます。発表言語は日本語・英語のどちらも可、発表時間は質疑応答を含め 30 分とします。

なお、大会終了後に研究発表の中から Journal CAJLE vol. 12 への掲載候補を選定し、投稿のご案内をいたします。提出された論文は、査読審査の上、採否の決定を行います。

研究発表をご希望の方は以下のものを電子メールの

添付(.doc)にて下記までお送りください。

- 1) 発表タイトル(日本語と英語)
- 2) 発表論文の要旨(日本語または英語 1 ページ)
- 3) 発表者の氏名(日本語とローマ字)
- 4) 所属機関および役職(日本語と英語)
- 5) 電子メールアドレス、電話番号、および郵便住所  
大会発表申し込み先: jotaro.arimori@utoronto.ca

(件名は"CAJLE 2010"をお願いします)

締切:2010年4月8日(木)必着

採否通知:2010年5月7日(金)

当振興会規定により発表者は当会会員に限ります。非会員の方には発表に際し入会手続きをお願いいたします。入会案内は CAJLE ウェブサイト(<http://cajle.info>)をご覧ください。

### CALL FOR PAPERS: CAJLE Annual Conference 2010

Theme: Emerging Possibilities for Japanese Language  
Education: Integrating Language, Content and  
Culture

Conference Date: August 13 (Fri)-15(Sun), 2010

Conference Venue: The University of British Columbia

Abstract Submission Deadline: Thursday, April 8, 2010

Notification of Acceptance: Friday, May 7, 2010

The Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE) is pleased to announce that its 22nd Annual Conference will be held at the University of British Columbia in Vancouver from Friday August 13 through Sunday August 15. This conference will gather together teachers of the Japanese language and academics in related fields from institutions around the world. The conference will consist of a keynote speech, paper presentations, workshops and an expert panel discussion.

We invite submission of abstracts for paper presentations on topics including, but not limited to, Japanese linguistics, Japanese language pedagogy, Japanese as a heritage language, as well as innovative teaching techniques. Submissions related to the conference theme are especially welcome. The allocated

time for each paper including questions and discussion will be 30 minutes. We also welcome group submissions on a common theme. Presentations may be given in either Japanese or English.

Please e-mail submissions as an attachment in .doc (Microsoft Word) file format, with the following information to: [jotaro.arimori@utoronto.ca](mailto:jotaro.arimori@utoronto.ca) (please specify the subject line as "CAJLE 2010").

- 1) paper title (in both Japanese and English),
- 2) one-page abstract (in either Japanese or English),
- 3) name(s) of the presenter(s) (in both Japanese and English),
- 4) current affiliation and title (in Japanese and English),
- 5) contact information including e-mail address, phone number, and mailing address.

Selected presenters at the conference will be invited after the conference to submit their papers for article length publication in Volume 12 of the Journal CAJLE. Those submissions will undergo a separate reviewing process set by the standards of the journal.

Presenters must be members of CAJLE. Membership information is available at: <http://www.cajle.info>

## 支部会・教師会・研修会情報

この欄では CAJLE の地域支部会のみでなく、世界各地の日本学学会、カナダ各地に存在する日本語教師会、カナダ国外で CAJLE と何らかの形で関係のある日本語教育関係の団体などの活動を紹介していき、教師会間のネットワーク形成を促進する一助としたいと考えています。今号では「JSAC」、「ICJLE」、「NihongoBC」および「CASLT」の活動の様子を報告していただきます。(編集部)

## 「JSAC – Japanese Studies Association of Canada カナダ日本研究学会」

太田徳夫

カナダ日本研究学会執行部渉外担当、ヨーク大学

E-mail: nota@yorku.ca

カナダ日本研究学会(通称 JSAC)は、カナダ唯一の日本研究者のための組織である。1987年にアルバータ大学で「近代日本」をテーマとした学会が開催されたのを嚆矢として、翌年以降年次総会及び学会がカナダ各地で、特に大学を中心として、開かれてきた。設立当初は、社会学者による、社会科学各分野のための学会であったが、1990年代に入って、言語及び文化に関する部会も設置されるようになり、現在では、政治・経済・社会・芸術、文学・哲学・宗教・人類学・地理学・言語・言語学・コミュニケーション・科学など、日本研究に関わるあらゆる分野を包摂する学際的な学会に変容している。現会長はウォータールー大学人文学部長のケン・コーツ氏で、常時会員百名弱のこじんまりとした学会ではあるが、例年の学会には、カナダだけではなく、アメリカ、日本、またその他の国からも発表者が出席し、多い時には二百名以上の出席者がある。参会者から、しばしば聞かれる意見は、小さい学会なので、色々な部会に出席し、異なる分野の研究発表が聞けること、会員が非常に友好的で、それぞれの発表にも、痛烈な批判ではなく、各分野の有識者の非常に有益なアドバイスがもらえるという声である。JSAC は、ここ数年来、特に若手の日本研究者の養成に力を入れており、大学院生の発表も多く奨励している。学会発表に経験の少ない若手の研究者には絶好の発表の機会になると思われる。それと同時に発表論文の質の向上にも心がけ、それぞれの分野の研究者が、毎年異なるテーマの下に日本研究

における新しい側面を模索する研究発表を行っている。

JSAC は設立当初より、主として国際交流基金からの助成金によって年次総会・学会の開催と運営を行ってきたが、今年十月にレスブリッジで行われた学会も二十二回目となり、カナダにおける日本研究者の世代交代と、若手研究者の台頭が顕著になり、国際交流基金の長年にわたる援助が実り始めていると言えよう。その他、在カナダ日本公館及び企業からの支援と援助も本学会継続の大きな一助になっていることを付け加えておきたい。

カナダ日本研究学会のもう一つの試みは、世界にある日本研究学会との連携・協力で、2007年に本学会初めての国際学会がヨーク大学で開催されたのは、各国の日本研究者とのネットワーク作りが目的の一つであり、オーストラリア、メキシコ、ヨーロッパから基調報告者を招待し、他国からの参会者も含めて、友好を深め、将来の協力を誓った。近い将来、日本研究の世界組織を構築することもその射程に入れている。現在のところ、オーストラリア日本研究学会及びヨーロッパ日本研究学会、また日本カナダ研究学会が主な協賛団体である。

当学会には、これまであまり日本語教育関係者の出席が見られず、残念に思っていたが、最近、少しずつではあるが、日本語教師の参加が見られるようになり、非常にいい傾向だと思っている。日本語を教えるためには、日本に関する各分野の知識が必要とされるので、JSAC は一年に一度、学際的な知識を吸収するための絶好の機会であると思われる。筆者は毎年、言語・文化の部会

を組織して、言語教育の発表を奨励してきたが、ただ出席するだけでなく、研究発表もしてみようという日本語教育の実践者が増えることを期待している。

尚、詳しくは、下記のウェブサイト参照のほど。

<http://buna.arts.yorku.ca/jsac/>

## 日本語教育国際研究大会(ICJLE) 2009

矢吹ソウ 典子  
ヨーク大学

今年の夏 7月13日から16日にかけて、オーストラリアのシドニーで日本語教育国際研究大会(ICJLE)が豪州日本研究学会(JSAA)と合同で開催された。日本語、日本研究の教育者や研究者が世界各国より一堂に会しての大規模な大会であった。

日本語教育国際研究大会が南半球で催されるのは今回が初めてということで、大会運営委員長のトムソン木下千尋教授によれば、日本語教育と日本研究の両分野が「魅力ある連携・協働を議論すること」を目的の一つとして豪州日本研究学会と合同で行われたという。ニューサウスウェールズ大学とシドニー大学の両方が開催協力大学として参加し、美しいニューサウスウェールズ州立美術館で開会レセプション、シドニー大学の歴史あるマクローリン・ホールで大会晩餐会が開かれるなど、豪華なイベントも伴った。基調講演と特別講義は、日本史、日本文学、言語学、言語教育、第二言語習得研究など、多岐に渡った分野で著名な何人もの研究者の講演があり、自分が興味のある分野に関する講演はもちろんのこと、普段はあまり触れることのない分野の専門家の話を聞くのは大変刺激になった。また、「日本研究と日本語教育の連携」のテーマのもと、プリンストン大学教授・元 ATJ 会長の牧野成一先生をコーディネーターに、世界 8 か所の日本研究や日本語教育関係の学会の代表者によるパネルディスカッションが行われ、各地の現状と課題について発表・討議された。一般の発表セッションも14日から16日まで午前と午後と目白押しで、その合間の休憩時間にも、日本から出版物と一緒に飛んできたというくろしお出版やジャパントイムズなどの出版社によるブックフェアや、最近新しい教材を出版した先生

方のワークショップがあったりと、盛りだくさんのプログラムだった。ただ、参加者数が多かったため(大会参加者リストによると全部で500人以上)、発表の横並びのセッションの数が非常に多く、聞きたくても行けない発表がかなり出てきたり、人気のあるパネルとかち合った発表者の聴衆の数が極端に少なかったりするケースがいくつかあったのが残念であった。

今回の大会で改めて知ったことだが、オーストラリアの日本語学習者の数は英語圏では世界で一番目、中国・韓国について三番目に多いという。地理的な影響もあるであろうが、オーストラリアの各大学の日本語プログラムの規模の大きさや初等教育からの日本語導入など、日本から遠くはなれたカナダと比べるとだいぶスケールが違うという気がした。また、日本研究の分野で活躍されている教授連も非常に日本語が流暢でほとんどが通訳の必要がないというのも印象的であった。

シドニーの空港に降り立った途端、参加者とおぼしき面々が何人か税関で並んで待っているというほどの盛況ぶりの大会で、日本研究や日本語教育に関係している人たちがあれほどの数で集まるのはまれなことだろうと思った。個人的なレベルでは、早稲田大学の川口義一先生や東京外国語大学の宇佐美まゆみ先生など、日本語教育の第一線で活躍なさっている先生方と再会し、食事やお酒を前に親しくお話ができたのが嬉しいボーナスであった。また今回初めてお会いした方々もさまざままで、卒業した大学が一緒だったり博論の試験官等が同じだったりとどこかでつながりのある人たちから、今回全く初対面で言葉を交わし日本語教育や第二言語習得の話で盛り上がった人たちまで、何十人もの方々と交

流ることができた。帰国してからも何人もの人たちからフォローアップや問い合わせのメールが来たのは、他の学会では経験したことのないことだった。

日本語教育国際研究大会は原則的には隔年で行わ

れることになっているらしいが、開催候補地がここ数年いくつか続けて名乗りをあげており、来年はまた台湾で開催を予定しているという。台湾での大会もさらに盛況なものになることだろう。

### B.C. Japanese Teachers' Summer Seminar 2009

Sachiko Renovich  
Barnaby High School, BC

The B.C. Japanese Teachers' Summer Seminar, sponsored by The Japan Foundation, Toronto, and Nihongo BC: BC Teachers of Japanese, was held August 25-27<sup>th</sup> at the National Nikkei Heritage Centre in Burnaby. Mr. Makoto Netsu from The Japan Foundation's Japanese-Language Institute in Urawa, Japan and Ms. Ayumi Nagatomi, Japanese Language Advisor at Alberta Education (sponsored by The Japan Foundation) provided sessions on pedagogy and introduction to teaching resources. With support from CASLT, we were also able to provide travel grants for out-of-town participants and lunches for the 3-day seminar. Participants commented on the great opportunity at this Summer Seminar for teachers from secondary, post-secondary and heritage language schools to come together and collaborate. It also allowed the teachers and student teachers to listen to some of the challenges and initiatives taken by those in different teaching environments.

A main feature of the Summer Seminar was the workshops with Mr. Netsu and Ms. Nagatomi on language teaching pedagogy. The sessions on specific skills such as reading and speaking made teachers reflect on the basic characteristics of the skills and think of ways in which to create tasks which targeted specific goals. Ms. Nagatomi's session on Google Maps showcased possibilities for student projects using the web feature using various media such as text, images and video. Mr.

Netsu's session on cell phone use in Japan highlighted the use of topics from current society as a tool in integrating culture and language teaching in Japanese classes. The model teaching in the workshops, as well as the connected activities like jigsaw discussions and role-play demonstrations, provided participants with a unique view as both student-participant and teacher-commentator.

Mr. Netsu also introduced various teaching resources produced by The Japan Foundation such as "Erin's Challenge! I Can Speak Japanese" DVD/book series and the on-line student proficiency test called "Sushi Test" (<http://momo.jpf.go.jp/sushi/>) in which students can aim to collect sushi pieces (the higher the score, the more expensive the sushi!). Donations of some teaching resources by The Japan Foundation, and a book display by Sophia Book Store from Vancouver, also allowed participants to have hands-on use of the resources in creating classroom activities to link with the resources.

The seminar culminated with group projects and presentations based on topics and activities participants had taken from the seminar. The overall theme was "making connections" between contexts such as what was learned at the summer seminar and individual classrooms, classrooms and the outside world, and students' lives and Japan, etc. The teachers worked collaboratively and presented their ideas while others



asked questions and provided input to add to the activities. The format of downloading the project idea template from the Nihongo BC website (<http://sites.google.com/site/nihongobc/>), discussing with the group and typing a plan on laptop computers, and projecting the plan on the LCD projector while presenting as a group was both efficient and effective. The plans have been added to the Nihongo BC website

for use by anyone interested, and the two guest presenters kindly agreed to join an e-mail list-serve with the seminar participants. The B.C. Teachers' Summer Seminar has been a wonderful starting point for networking and collaboration among secondary, post-secondary, and heritage language school teachers, and we are excited with the potential for further communication among Japanese teachers in the future.

### **The Canadian Association of Second Language Teachers (CASLT)**

Sarah Du Broy

The Canadian Association of Second Language Teachers (CASLT)

The Canadian Association of Second Language Teachers (CASLT) promotes the advancement of second language learning and teaching throughout Canada by creating opportunities for professional development, by encouraging research, and by facilitating the sharing of information and the exchange of ideas among second language (L2) educators.

We believe that second language learning is an essential component of a formal education and that every L2 teacher should have the opportunity to learn and grow in a supportive professional community. We are committed to enhancing awareness, appreciation, and understanding of the importance of L2 learning and teaching throughout Canada and beyond.

We value the importance of languages and the diversity of culture. We organize a variety of PD and events, such as CASLT Chez Vous, a one-day PD event offered regionally in partnership with a local organization. We also present workshops at provincial language conferences such as the BCATML and OMLTA. Our biggest event is our Languages Without Borders conference, held every two years. The next conference will be held April 7-9, 2011 in Montreal.

Each year, we offer bursaries to our members to

attend various PD events. Last August, we provided support to members wishing to attend the BC Nihongo Summer Conference. This year, we are offering five bursaries, of which one is for international languages teacher and program support. If you are a CASLT member, you are encouraged to apply today:

[http://www.caslt.org/pdf/Bursaries%20Application%20form%202010\\_ENG.pdf](http://www.caslt.org/pdf/Bursaries%20Application%20form%202010_ENG.pdf)

Each year, we also give three awards to our members:

- Our prestigious Robert Roy Award recognizes outstanding contributions by educators and researchers to the second language education field.
- Our HH Stern Award supports innovative classroom projects.
- Our Honorary Lifetime Member Award acknowledges individuals who have rendered significant service and demonstrated leadership in the advancement of second language education.

Second language educators can subscribe to our free monthly online newsletters that include Web gems for Japanese teachers. To receive them by email, contact Louise St-Amand: [members@caslt.org](mailto:members@caslt.org) or subscribe directly from our homepage: [www.caslt.org](http://www.caslt.org). Our Language Teachers' Calendar always features items of

interest to Japanese teachers and our multilingual Celebrating Languages poster series can enliven any Japanese classroom and its teacher guide (available free on our website) provides great ideas to encourage discussion on the benefits of languages learning. Finally, we offer resources and support for teachers of Japanese on our Web site at:

[http://caslt.org/resources/modern-lang/japanese\\_en.php](http://caslt.org/resources/modern-lang/japanese_en.php).  
Please feel free to contact our webmaster if you have any questions or if you have any resources that you would like us to recommend.

CASLT is looking forward to working more closely with members of the CAJLE and all Japanese language educators across Canada in the coming year.

## CAJLE オンタリオ部会

杉本陽子

8月の年次大会後に交流基金(JF)との共催で「セミナーワークショップ」をCAJLE 開発企画が中心になって開催しました。期待以上の参加者と反響があり、主催者側としては俄然やる気を感じ、その日の内に早速 JF と反省、今後の活動に向けて話し合いがもたれ、両機関共に今後も協力体制で臨もうという事になりました。なお、開発企画から離れ今後は地域の要請により対応しやすいようにオンタリオ部会が企画運営していくことが決まりましたので、ご報告いたします。第1回目は12月18日に開催することが決定していますので、詳細は [http://cajle.info/other\\_cajle\\_events](http://cajle.info/other_cajle_events)

をご覧ください。今後の活動はオンタリオ在住の理事を中心に企画する予定ですが、皆様からのアンケートにも様々なご意見、ご希望がありましたので、その声にお応えできるような内容にしていけたらいいと思っています。また、年間3回ぐらいのイベント開催を計画しています。内容は、セミナー・勉強会・実践報告・教材紹介他。第2回目は2010年初旬を予定していますが、まだ詳細は決まっておりません。皆様からのご意見、ご希望をお寄せいただけましたら大変ありがたいと思います。オンタリオ部会への問い合わせは [ysugi@sympatico.ca](mailto:ysugi@sympatico.ca) (杉本)までお願いします。

## 日本語教育イベントカレンダー

### 12月6日(日) 日本語能力検定試験 Japanese Language Proficiency Test (JLPT)

カナダでは以下の3会場で実施されます。/ JLPT will be held at the following three sites in Canada:

- Vancouver, BC -- Capilano University  
<http://www.capilanou.ca/programs/languages/japanese/Japanese-Language-Proficiency-Test--JLPT-.html>
- Edmonton, AB -- University of Alberta  
<http://www.ptjc.ualberta.ca/JLPT.cfm>
- Toronto, ON -- York University  
<http://buna.yorku.ca/jlpt/>

2010年度からは改訂され、今までの1級に当たるN1からN5までの5レベルとなります。詳しくは次のウェブサイトをご覧ください。/ Starting in 2010, JLPT will be revised into a five-level test, from N1 to N5, with N1 being the highest level. For more information, please visit the following website:

- <http://www.jlpt.jp/j/about/new-jlpt.html> (Japanese)
- <http://www.jlpt.jp/e/info/index.html> (English)

### 3月 日本語弁論大会 Regional Japanese Language Speech Contest

<http://www.jftor.org/language/speech.php>

日本語弁論大会は以下の7地域にて行われます。/  
Regional speech contests are held in seven regions across  
Canada:

- British Columbia

March 6, 2010 @ Simon Fraser University, Burnaby

Campus

[http://www.vancouver.ca.emb-japan.go.jp/en/culture/culture\\_speech.htm](http://www.vancouver.ca.emb-japan.go.jp/en/culture/culture_speech.htm)

- Alberta

March 6, 2010 @ University of Alberta

Contact: Xiao Zhang (ptjc@ualberta.ca)

- Manitoba

Date TBA @ University of Manitoba

Contact: Dr. William Lee (leewj@ms.umanitoba.ca)

- Toronto, Ontario

March 13, 2010 @ University of Toronto

<http://buna.yorku.ca/ojsc/>

- Ottawa, Ontario

March 6, 2010 @ Embassy of Japan

Contact: Prof. Yoko Azuma Prikryl

(yoko\_azuma-prikryl@carleton.ca)

- Quebec

March 6, 2010 @ Université du Québec à Montréal  
(UQAM)

Contact: Hirai Misa (hirai.misa@uqam.ca)

- Atlantic Provinces (NB, NS, PEI, NF)

March 13, 2010 @ Mount Allison University

Contact: Miyako Oe (moe@mta.ca)

### 3月28日(日) 全カナダ日本語弁論大会 National Japanese Speech Contest

地域大会において各出場部門で優勝した者が全国大会への出場資格を得ます。/ The first prize winners of the four categories in the regional speech contests are eligible

to participate in NJSC:

- York University, Toronto, ON

<http://buna.arts.yorku.ca/njsc/>

## リレー随筆

### 「聞き手」の存在

安部さやか

グランド・バレー州立大学

2008年のCAJLE年次大会にて、言語使用に見られる「聞き手への配慮」というものについて研究発表させていただきました。会話の相手を意識するということは、話し手と聞き手の主観同士の関わりととらえることができ、「間主観性 (intersubjectivity)」という言葉で表されることがある。この性質を言語の一部とみなすことは、語学教育

においても、相手の立場や状況を読み取る力を学習者に求めることにもつながる。特に日本語は「空気が読めない」という表現が定着してしまうぐらいだから、間主観性の強い文化を持ち合わせていると言えるかもしれない。また、自分をへりくだる表現やかしまる言い方、代名詞の使い方などにも聞き手への意識が表れる。言葉を書く

場合は相手が「読み手」になるわけだが、同様に様々なことを意識する。例えば、Eメールを書く時に、受け取る相手の立場になって、冷たく聞こえないか、「です・ます」ばかりだと丁寧すぎるだろうか、顔文字を入れると砕けすぎないだろうか、などとあれこれトーンを気にしながら書くことが誰にでもあるのではないかと思う。(一方、読者が不特定多数であるブログや、Facebook、Twitterといった「書きっぱなし」がしやすいインターネット・サービスの普及で、その辺の感覚が薄れてきている気もする。) 斯く言う私も本稿を書き進めながら、この部分は漢字が続いて読みにくいだろうか、長文で読む人は疲れてしまうだろうか、書き言葉とはいえ「だが」の連発もどうだろうなどと考えながら、少々緊張気味である。こうして考えると、聞き手や読み手の存在を意識するという事は、自分の言葉遣いを客観視することでもあり、ある意味自意識の問題であるかもしれない。

さて、本稿はニューヨーク州立大学バッファロー校の下條光明先生からバトンをいただき、書かせていただいているものである。先生が前号でお書きになった随筆で文脈の難しさや面白さを改めて実感し、同じくコンテキストに関する話題で、ここでは聞き手(または読み手)に焦点を当ててみようと思った次第である。読んでくださる人を退屈させてしまうかもしれないが、ここはCAJLE、随筆、ともに(ほとんど)初心者ということでご容赦いただきたい。

冒頭で研究発表と述べたが、内容は上述の「間主観」的な意味や用法を歴史的に見たものである。最近「バイト敬語」「曖昧な表現」などと言われ批判されがちな「ビールでよろしかったでしょうか」や「こちら、コーヒーになります」などの例に絡め、助動詞「～てしまう」の用法を取り上げてみた。私事で恐縮であるが、この研究をするようになった経緯を振り返ってみる。大学院在学中にクラスのレポートのため(やや苦し紛れに)することに決めた「てしまう」をはじめいくつかの助動詞の意味分析がきっかけで、その一部が博士論文につながっていったのだが、まず取りかかったのは、普段自分が当たり前に使っている言葉の意味をあえて丁寧に記述していくという作業であった。これが思いのほか至難の業だったの

だが、日本語を話さない指導教官とああでもないこうでもないという例を羅列し、直訳のようなぎこちない表現で日本語の感覚を伝えながらやりとりしているうちに、細かく記述することや言葉で表せないことについて考えるのが楽しいと感じるようになった。ご存知のように「～てしまう」は終了や自発・無意志といった意味の他に話者の残念に思う気持ちを表すことも多い。さらに、それらのいずれにも該当せず、一見これといった意味を持たないように思われる用例(特に短縮形「～ちゃう」で)もデータにいくつか見られた。(「久しぶりにピアノ弾いちゃった」「ぼくは、ちょっと軽いついて気がしちゃうんだけど」など。)後にこれらの意味の成り立ちを歴史的に調べてみることにし、まずたどり着いたのはこの手の意味変化はコミュニケーションを考慮せずして説明がつかないということだった。「～てしまう」は、助動詞として現れるようになった江戸時代初期あたりには前述の本来の意味で使われる例がほとんどだった。ところが、現在では話者の(残念な)気持ちを表す使い方が最も多く、さらに最近は上述の「意味を持たない」タイプも増えつつある。これらが先ほど述べた「曖昧さ」に通じる部分であって、「和らげる」言い方としてコミュニケーション上重要な機能を果たしている。英語においても同じような状況で、*I kinda think that...*は *kinda (kind of)* がないよりは、ソフトな感じがする。

このようなコミュニケーションにおける日頃の私たちの意識が言葉を少しずつ変えているかもしれないと思うと興味深い。上述のような悪意のない間接的な言い方には規則性があり、それらを曖昧だと非難するか、思いやりから来るものとして好感を持つかは、実に紙一重である。同時に、実際他人に不快感を与えるかどうかは言葉を使う人達の判断からなるもので、れっきとした社会言語現象であるから、それに準じて「適切な」言葉の使い方を学習者に教えていくことも必要なのは確かだ。

上で例にあげた歴史変化やそれによって生じた間主観の意味・用法の存在は他の多くの言語にも共通していることが様々な研究でわかっている。こうした普遍的側面を考えると、日本語学習においても、文法や文字よりもある意味基本的なことなのかもしれない。しかし、実

際のところ、例えば、間接的な表現を実践的なストラテジーとして教えるのは意外と難しい。よく教科書で「明日は、ちょっと...」といった、誘いを断る例が扱われるが、日本語は変な言語だと思いながら、何となく好奇心で使うにとどまる学習者も少なくない。言い回しそのものではなくメカニズムとしてどこまでが日本語特有で、どこまでが学習者の母語や文化にも共通しているのかが明確でないためステレオタイプになりかねない。

日本語のクラスで扱いが難しいのは間接的な言い方に限らず、聞き手への意識というものを全般に言えるのかもしれない。例えば、相槌やフィラーの有無も、もともと個人差がある。しかも、「意識する」といっても、敬意や同情といった情意的な性質を伴うものから、相手のすでに知っていることを考慮するといった情報の操作に関わるレベル(終助詞「よ」と「ね」の違い、文脈からわかる言葉の省略、など)まで様々考えられる。そう考えると、何を以って語学力とみなすべきかというのは意外と難しい問題だ。

以上、言語変化の視点から「聞き手」(「読み手」)の存在について綴ってみた。質問を投げかけたような半端な終わり方だが、この「コミュニケーションの向こう側」の性質自体が未だ不明確なのと、同時に奥が深いということでもある。近年、コンピュータ科学などの視点から、広告やブログから書き手の様々な情意的要素や、それらが

向けられる先である読み手の性質を体系的に「読み取る」ための画期的な研究もなされているようである。(とは言ったものの、正直詳しくはわからないので、機会があればもっと知りたいと思っている。)そういった意味でも「間主観性」はこれからますますホットな話題になっていくのではないかと思う。

さて、次のリレー随筆の投稿者ですが、アルバータ大学の下野香織先生にご快諾いただきました。下野先生には今年(2009年)の年次大会で初めてお目にかかり、限られた時間ではありましたがお話しする機会がありました。いつかまた何らかの形で日本語教育や言語学の研究について伺いたいと思っていたので、バトンをお渡しできることをとても嬉しく思います。次回の随筆を楽しみにしております。

#### 執筆者のプロフィール

札幌市出身。カナダ・オンタリオ州留学を経て、数年後ニューヨーク州立大学バッファロー校言語学部にしばらく落ち着き、日本語教育の機会に恵まれる。同校にて言語学博士号を取得し、伊トレント大学リサーチ・フェロー、米ヴァッサー大学客員助教授を経て、現職に至る。

## CAJLE 掲示板

### 2008年度年史 主な活動と内容 (2008年6月～2009年5月)

#### 2008年

- |       |  |   |
|-------|--|---|
| 7月1日  | ニュースレター36号発行   | 交流基金及び、同トロント日本文化センター、在トロント日本国総領事館。テーマ:「変りゆく日本語と日本語教育の今 - The Japanese Language in Transition and Its Education at Present」大会実行委員長:大江都(マウントアリソン大学) |
| 7月1日  | 2007年度第三回理事会(オンライン)                                  |   |
| 7月7日  | 王伸子、桶谷仁美、清水道子、永瀬治朗、揚暁捷、ライリー洋子諸氏理事辞退。理事ミーティングサーバーの変更。 |   |
| 8月15日 | CALJE 創立20周年記念年次大会(国際交流基金トロント日本文化センター)。後援:国際         | 8月15日 - 基調講演: 嘉数勝美(国際交流基金日本語事業部長・日本語グループ長)「変りゆく日本   |

語と日本語教育の今」

- 教師研修会(プログラム順): James Stanlaw ( Illinois State University ) “Japanese English: Language and Culture Contact”、川口義一(早稲田大学)「日本語教育における待遇表現の指導」
- 特別講演: 平田オリザ(大阪大学・劇作家・演出家)共催 - 国際交流基金、国際表現言語学会、CAJLE
- - CAJLE 出版物展示及び即売

8月16日 研究発表プログラム 第1日目(発表者プログラム順):

- 研究論文発表 1-1 進行 柴田智子(プリンストン大学): ショー出口香(パーデュー大学)、有森丈太郎(トロント学)、藤岡典子(シンシナティ大学)、尹智鉉(早稲田大学)
- 研究論文発表 2-1 進行 下條光明(バッファロー大学): リグス秀美(ソーカ・ユニバーシティ・オブ・アメリカ)、池田佳子(名古屋大学大学院)、安部さやか(ヴァッサー大学)、筒井通雄(ワシントン大学)
- 研究論文発表 1-2 進行 池田佳子(名古屋大学大学院): ハウ博美・赤城永里子・吉田愛子(大阪大学シャドーイング研究会)、柴田智子(プリンストン大学)、虎谷紀世子(ヨーク大学)
- 研究論文グループ発表 2-2 グループ発表: 崔英淑(大邱韓医大学校)、古内綾子(拓殖大学留学生別科)、佐藤綾(大邱韓医大学校)、片野洋平(カセサート大学教育学部附属高校マルチリンガルプログラムチョンブリ校)
- パネルディスカッション「変わりゆく日本語と日本語教育の今」: パネリスト 嘉数勝美(国際交流基金日本語事業部長・日本語グループ長)、川口義一(早稲田大学)、鈴木睦(大阪大学)、室屋春光(国際交流基金派遣アルバータ州教育省)

- CAJLE 出版物展示及び即売

8月16日 CAJLE 創立 20 周年記念懇親夕食会 (於: 国際交流基金トロント文化センター)

8月17日 研究発表プログラム 第2日目(発表者プログラム順):

- 会場 1-3 進行 桑原陽子(福井大学留学生センター): 徳増ゆかり(プリンストン大学)、小室リー郁子(トロント大学)
- 会場 2-3 進行 レベッカチャウ(ブリティッシュ・コロニア大学): 楠正子(カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校)、相津頼子・佐々木真実(カールトン大学)
- 会場 1-4 進行 安部さやか(ヴァッサー大学): 粟飯原志宣(大阪大学大学院生)、高見智子(ペンシルベニア大学)、筒井通雄(ワシントン大学)、岡まゆみ(ミシガン大学)
- 会場 2-4 進行 楠正子(カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校): 桑原陽子(福井大学留学生センター)、半沢千絵美(アイオワ大学大学院生)、吉川貴子(大阪大学大学院生)
- パネルディスカッション「日本語コミュニケーション教育における演劇の持つ可能性を探る」: 野呂博子 (University of Victoria)、橋本慎吾 (岐阜大学)、平田オリザ (大阪大学)
- CAJLE 出版物展示及び即売

8月17日 2008 年度定例総会 (国際交流基金トロント日本文化センター): 大江会長より下條光明氏を議長に指名。会員実数 55 名中、委任状 15 通、出席者 25 名、合計 40 名により総会が成立。2007 年度活動報告及び 2008 年度活動予定を発表。2007 年度会計報告、及び 2008 年/2009 年度予算案が提出され承認された。理事選出の年に当たり、原理事 9 名(五十音順)、畔上ラム智子、大江都、小室リー郁子、下條光明、杉本陽子、高崎麻由、竹井明美、

西島美智子、レベッカチャウ諸氏が継続することが承認された。新理事(五十音順)には、青木恵子、有森丈太郎、伊東義員、ウッド弘枝、ハウ博美、室屋春光諸氏5名が候補に挙がり承認された。

大会閉会

8月17日 2008年度第1回理事会(国際交流基金トロント日本文化センター)

8月18日 大会後自由参加によるナイアガラ日帰り小旅行

12月 ニュースレター37号発行

## 2009年

3月4日 開発企画担当の伊東氏より JAMES MOTO ENTERPRISES(SHOWFLEX)、DAVIS LLP、YAMAHA CANADA MUSIC 社から、スポンサー協力を得たことが報告された。

3月27日 西島美智子氏が CAJLE 副会長に就任

5月20日 CAJLE 年会費の改正が承認され、また会員には、特典が付き、更に会費のクレジットカードでの支払いが可能になった。(2009年6月より実施)

## CAJLE Membership

We welcome everyone interested in Japanese language education.

CAJLE members receive the Journal CAJLE (one issue annually), and the CAJLE Newsletter full of information about Japanese Language Education in Canada (two issues annually). Members can also attend the annual CAJLE conference, workshops and other related events at a reduced rate.

Term of Membership: Memberships start every June and continue through May of the following year. Please kindly complete your payment by the end of October.

Membership Fee:

\*Due to an increase in the cost, as well as for members' convenience, changes in membership categories and fees come into effect as of June 2009.

- Regular membership

Canadian residents: \$ 45 CA

Outside Canada: \$ 45 US

- 3 years membership

Canadian residents: \$ 120 CA

Outside Canada: \$ 120 US

- Student membership

Canadian residents: \$ 30 CA

Outside Canada: \$ 30 US

- Institutional membership (up to 4 members)

Canadian residents: \$ 120 CA

Outside Canada: \$ 120 US

How to Join:

For Credit card payment, please go to <http://www.cajle.info>

We also accept personal cheque and bank transfer.

Please fill out the application form (available on CAJLE website) and mail it with the appropriate membership fee to the following postal address.

Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)

P.O. Box 75133

20 Bloor St. East

Toronto, Ontario M4W 1A0, CANADA

Contact us: [Cajle.Kaikei@gmail.com](mailto:Cajle.Kaikei@gmail.com)

## 国際交流基金コーナー

## 日本語アドバイザーから

永富あゆみ

Alberta Education

6月から国際交流基金より派遣専門家としてアルバータ教育省に席を置いている永富と申します。年次大会でお目にかかった先生の他に、過去にお仕事を一緒にさせていただいた方もいらっしゃいますので、初めましてと言っておきながら迷いますが、今後とも、どうぞ宜しくお願いいたします。

日本に本部のある国際交流基金からの派遣ということで、国外での生活は大丈夫ですかとお気遣いいただくことも多いのですが、(外国語が上達しない)出たっきり邦人です。その昔、アメリカの田舎町で日本語についての質問に答えられなかったのがきっかけで、話せるということと教えられるということは違うのだなあ、と興味を持ち、日本語教育の道に入りました。早速オーストラリアの大学の教員免許コースで貴重な経験ができたのはよかったのですが、永住権のない自分は、同期が次々に採用されるのを見ているだけ。ところが、教員免許が功を奏したのか、アメリカのテネシーとオレゴンの高校に一年ずつ、助手として滞在とあいなりました。気候、校風、教育理念など、色々な面で異なる二校で、日本語担当の先生のあたたかいご指導に感激したり、学生の元気すぎる姿に怒りの鉄拳を飛ばしたりの二年間でした。その後、オハイオ州立大学の院で教授法を学び、メイン州の Bowdoin College で雪かきを堪能し、マサチューセッツ工科大学でアニメとコンピュータに囲まれて過ごしました。教壇を離れた今、「授業がもう始まるのにまだ教案が…」という悪夢を見なくなり、自分の学生がいないことを寂しく思うこともあります。カナダの先生方の熱意に接し触発されることしきりです。

私にはアルバータ教育省の日本語アドバイザー、国際交流基金派遣専門家という二つの肩書きがあります。前者としての主な業務は、アルバータ州の指導要領、教

師用指導手引きなどの開発支援です。後者としては、カナダ全域での日本語教育振興支援、例えば、学校を訪問し直接先生方から現場の声を伺う、各地教師会における出張セミナーの企画参加、ITを活用し遠隔地の先生方への情報提供、様々な機関のネットワーク構築の促進等 可能性は無限に膨らみます。実際には未だ手探りで進んでいる状態ではありますが、現場で頑張っている先生方にご教示頂き少しでもお役にたてれば、と日々願っておりますので、どんな小さなことでも、メールでも、電話でも、スカイプでも構いませんのでどうぞお気軽にご連絡くださいますよう、お願い申し上げます。

永富あゆみ Ayumi Nagatomi

Japanese Advisor

(sponsored by the Japan Foundation)

Curriculum Branch, Alberta Education

8th Floor, Capital Boulevard

10044-108 Street NW

Edmonton, Alberta, T5J 5E6, Canada

Tel: 780-415-6165 Fax: 780-422-3745

Email: ayumi.nagatomi@gov.ab.ca

Skype ID: ayumi.nagatomi

もうご存知の方も多いかと思いますが、「日本語カナダ」メールグループにて州や機関を超えての様々な情報交換を支援しておりますので、この機会にご登録いただければ幸いです。登録は ayumi.nagatomi@gov.ab.ca までメールをどうぞ。

Nihongo-Canada-subscribe@yahoogroups.com



## 2009年海外日本語教育機関調査

### Survey of Overseas Organizations Involved in Japanese-Language Education

ジャパン・ファウンデーションは、世界の日本語教育の現状を把握するために、本調査を3年に1回実施しています。

前回2006年の調査結果は以下のとおりです。

<http://www.jpfe.go.jp/e/japanese/survey/result/index.html>

本調査の結果は、世界中の日本語教育関係者に日本語教育の現状に関する基礎的な情報を提供したり、日本語教育機関や関係者同士がネットワークを築いたりする上で、非常に貴重な資料として活用されています。

The Japan Foundation is currently conducting a survey on Japanese-Language Education around the world.

The results of the most recent survey in 2006 can be viewed at the following website:

<http://www.jpfe.go.jp/e/japanese/survey/result/index.html>

Survey results will provide valuable information on the current situation in Japanese-language education overseas and will be used for networking purposes between institutions and individuals working in this field.

All institutions providing Japanese language education

本調査では外国語として日本語を教えているすべての機関を対象とします。調査内容は、あなたの機関・部門に関する基本的な情報を問うものです。オンラインで回答が可能で、所要時間は10分程度です。

本調査にご協力いただいた機関・部門には、電子メール等で補助教材(絵教材等)を贈呈いたします。

本調査への参加方法の詳細については、[survey@jftor.org](mailto:survey@jftor.org)までご連絡いただきたくお願い申し上げます。日本語教育における本調査の意義にご賛同いただき、本調査へのご協力をお願い申し上げます。

in a classroom setting are invited to participate in this survey. Basic questions regarding your organization, the kind of Japanese program offered, the number of students, etc. will be asked. The web survey will take only 10 minutes to complete. In return for your cooperation, we will send you teaching aids (pictures or other materials) via e-mail.

Please contact [survey@jftor.org](mailto:survey@jftor.org) for more information on how to participate.

Thank you very much for your cooperation.

## 巻末言

室屋春光(ニュースレター編集担当)

のっけから私事で恐縮ですが、09年6月19日でカナダでの国際交流基金派遣日本語教育専門家/日本語アドバイザーとしての仕事が終わりました。エドモントンを本拠地にしていただいていたこともあって、3年間の任期中はCAJLEの会員の皆さんともそうそう頻りに顔を合わせる機会はなかったのですが、年次大会の折などには新参者の私を暖かく迎え入れていただき、本当にありがたい

ことだと思っておりました。この場を借りてあらためてCAJLEのみなさまにお礼を申し上げます。ついになりませんが、幸いなことに国際交流基金の日本語教育専門家プログラムでイタリアへの派遣が決まり、同基金のローマ日本文化会館日本語講座の主任講師として9月20日に着任しました。任期は2年間の予定です。

\* \* \* \*

9月の末からローマに住んでいる。イタリア語は、できない。アパートから仕事場までは歩いて30分。毎朝 iPod に入れたイタリア語講座を聞いて、道行く人の目など気にせず大声で復唱するように努めてはいる(言語学習の王道!?)。しかし、残念なことにイタリア語は文法がえらく複雑で、集中講座にでも通わなければ向こう2年間でどのぐらいこの言語がものになるか甚だ疑わしい。それに輪をかけているのは年齢だ。小生の脳は五十を過ぎてから記憶中枢がかなり怪しくなっていて、イタリア語の文法も単語もなかなか定着してくれない。

というわけで、90年代半ばにハンガリーのブダペストに住んで以来、非英語圏に在住するのは十数年ぶりのことだが、その地の言語に不自由な者ならば誰もが味わうあの何ともいえない感覚を再び味わっている。日本語のできるイタリア人やイタリア語のできる日本人に頼ったり現地語でも母語でもない第三言語の英語に訴えたりしなければ、日常の生活や仕事の上でいろいろと支障をきたす、というあの気まずさ、そして、現地語で機能できるようになるまでは部外者として扱われざるをえない、というあの疎外感だ。覚えのある方も多だろう。

しかし、こういう気分を味わう機会があるというのは、第二言語教育に携わっているものにとっては、ある意味で

はありがたいことなのであるかもしれない。第二言語習得の上でのいろいろな障碍を学習者の身になって考えることができるからだ。少なくとも当分の間は、日本語がなかなかうまくならない学習者の立場に立って自分の授業のやり方について考えるであろうことは確かだ。

それでは、言葉ができないからといってうちにこもりがちになるかという、私はそのようなナイーブな心の持ち主でもない。せっかく「永遠の都」ローマに滞在しているのだから、何もしていないのはあまりにももったいない。そこで、週末など暇があるときにはせっせとアパートを出て、いろいろなところを見て回るようにしている。テレビの泉やスペイン階段などの有名な観光スポットまでは歩いて30分そこそこ、コロセウムへも1時間弱で歩いていける。パチカンなどのやや遠目のところへ行くのにもメトロや市電、バスを自由に乗りこなせるようになった。趣味でメルボルンにいたときに始めて、その後、アメリカ、カナダでも続けたラグビーのレフリーも、ローマに着任してすぐレフリー協会にコンタクトをとり公認レフリーとして登録してもらった。選手たちの迷惑を顧みもせず、横着を決め込んで英語でわめき散らしながら笛を吹いている。あちこちの酒場に出没しているのは言うまでもない。

## 編集後記

先日、15年程前にお世話になった方々や学生たちに連絡する必要が生じ、さまざまなつてを頼ってお願いしてみたところ、あっという間にご本人達にたどり着くことが出来ました。いまや世界はメール、ブログ、mixi、facebook など、インターネットを介したあらゆる手段でつながっていて、瞬時に連絡を取ることが可能です。遅まきながらそれを実体験し、世界が小さくなったことに改めて驚かされました。当方、やっと Skype 始めました。安袁岐@金具洲頓 「暖冬」なのかなと喜んでいたのですが、12月に入り「甘かった」とガッカリしています。世界中に蔓延している H1N1 にも季節性インフルエンザにも十分にお気をつけください。良いお年をお迎えください。来年の年次大会でお目にかかるのを楽しみにしています。素妓素@都倫都 CAJLE ニュースレタ

ー第39号をお届けします。例によって、締め切りの日までにほぼすべての原稿がそろいました。お忙しい中、原稿を執筆していただいたみなさんの punctuality には本当に敬服します。ありがとうございました。学会のニュースレターですので、これでいいのだとも思うのですが、次号では娯楽性のある息抜きができるような記事も掲載できれば、と思っています。楽しい読み物の投稿を歓迎しますので、皆様、よろしく願います。無露野@羅馬

投稿のお願い: CAJLE ニュースレター編集部では CAJLE 会員の皆様からの投稿を歓迎します。小論、エッセイ、ご意見、耳寄り情報など、お気軽に編集部までお寄せください。 smuroya@gmail.com